



学校だより

令和8年5月29日
横浜市立仏向小学校
6月号

手を離して 目は離さず

校長 佐藤 裕二

毎朝、子どもたちの登校の様子を正門前の横断歩道で見守っています。自分から「おはようございます！」と笑顔で挨拶をする子どもが何人もいて、とっても幸せな気持ちで一日をスタートすることができています。

その一方で、気になっていることもあります。たくさんの児童が横断歩道を渡っているのに、集団心理なのか信号を気にせずに前の人に続いて渡ろうとする子も一定数います。きっと「青信号が点滅したら渡ってはいけない」ということを頭では理解しているのですが、なかなか普段の行動に結びついていかないようです。

令和8年度がスタートして2か月が経ちますが、すでに横浜市内では、小学生が被害に遭う悲しい交通事故が続いています。実は、統計的に見ても交通事故は7歳（1・2年生）が突出して多くなっていて、「魔の7歳」と言われています。小学校入学前は保護者と一緒に行動していた子どもが、小学校入学とともに一人または友達と行動することが増え、さらに行動範囲が広がっていくことも原因のようです。

ところで、「子育て四訓」というのを聞いたことがありますか。山口県の教育者が提唱したもので、発達段階に応じた親の関わり方を端的に示しています。スキンシップが何よりの安心感につながる乳児期、活発に動き回ることにしっかり安全を確保してあげなければならない幼児期を経て、少年期（主として小学生）を迎えます。心配だからといって、いつまでも手をつないでいたら子どもの自立を促すことができません。でも、手を離れたとしても、目はまだ離せないということです。もちろん、小学校に行ったり友達と遊びに行ったりする我が子をずっと見ていることは不可能です。「目を離すな」とは子どもの行動をしっかりと把握して、指導が必要な時には適宜声をかけていくことだと思います。「少年は手を離しても目を離さず」で、子どもたちが交通事故にあうことのないよう、家庭と学校がしっかりと連携しながら取り組んでいけたらと願っています。

【子育て四訓】

- 一．乳児はしっかり肌を離すな。
- 一．幼児は肌を離せ。手を離すな。
- 一．少年は手を離せ。目を離すな。
- 一．青年は目を離せ。心を離すな。

ちなみに、高学年になると青年期（主として中・高生）の入り口。子育て四訓は「目を離しても心を離すな」と教えてくれています。中学生にもなると、行動内容もいちいち保護者が把握することも難しくなってきます。それでも、心は離れていなければ、何か自分では解決できないような困難にぶつかっても、相談しようとするのではないのでしょうか。高学年は、その準備段階ですね。